

# 探訪 北の風景 46

## 旧住友石炭赤平炭砒遺跡 赤平市

青木和弘

見つめ直し、観光や芸術、教育などに活用しようという取り組みである。

旧住友赤平の立抗は、JR赤平駅から芦別側に約1キロ、根室本線を越えてすぐの、線路と並行する道路沿いにある。立抗と道路を挟んだ向かい側に抗口浴場があつて、坑内員は、ここで着替えて坑内に入り、ここで風呂に入つて炭じんの汚れを落としてから帰宅した。

その抗口浴場と立抗の周辺に、札幌市立大学デザイン学科の上遠野敏（かとおの さとし）教授や院生、学部生らの作品が展示され、同教授や学生が訪問者に作品の解説を行つていた。

時代に翻弄された産業遺構が北海道には数多くある。炭砒は明治以降、日本の産業近代化を牽引してきたが、1960年代以降、原油の輸入自由化と安い海外炭によつて瞬く間に衰退に追い込まれた。

かつて空知は、九州の筑豊を抜いて採炭量日本一を誇り、最盛期の60年ごろには大小100炭砒が操業、人口は約82万人（1960年国勢調査）を数えた。既に坑内掘りのすべての炭砒が閉山し、人口は31万人（2015年国勢調査）を切つている。

北海道で木々が色づき始める10月、赤平市の炭砒遺跡、旧住友石炭赤平炭砒（1938～1994年）を訪ねた。立抗やぐらなどの周辺施設が、2016年に住石ホールディングから赤平市に無償で譲渡され、そこを会場に、「赤平アートのプロジェクト」が開かれていた。「アートの力で炭砒遺産の価値と記憶を甦らせ、赤平の新たな物語を紡ぎます」というもの。主催は、NPO法人炭砒の記憶推進事業団と札幌市立大学、赤平コミュニティガイドクラブTANtan（タンタン）などによる実行委員会で、炭砒遺産を歴史資源として

赤平市内では、ほかにも茂尻炭砒（1918年～69年）、豊里炭砒（1937年～67年）、赤間炭砒（1937年～73年）が操業していたから、同市の人口は5万4635人から1万1105人と、



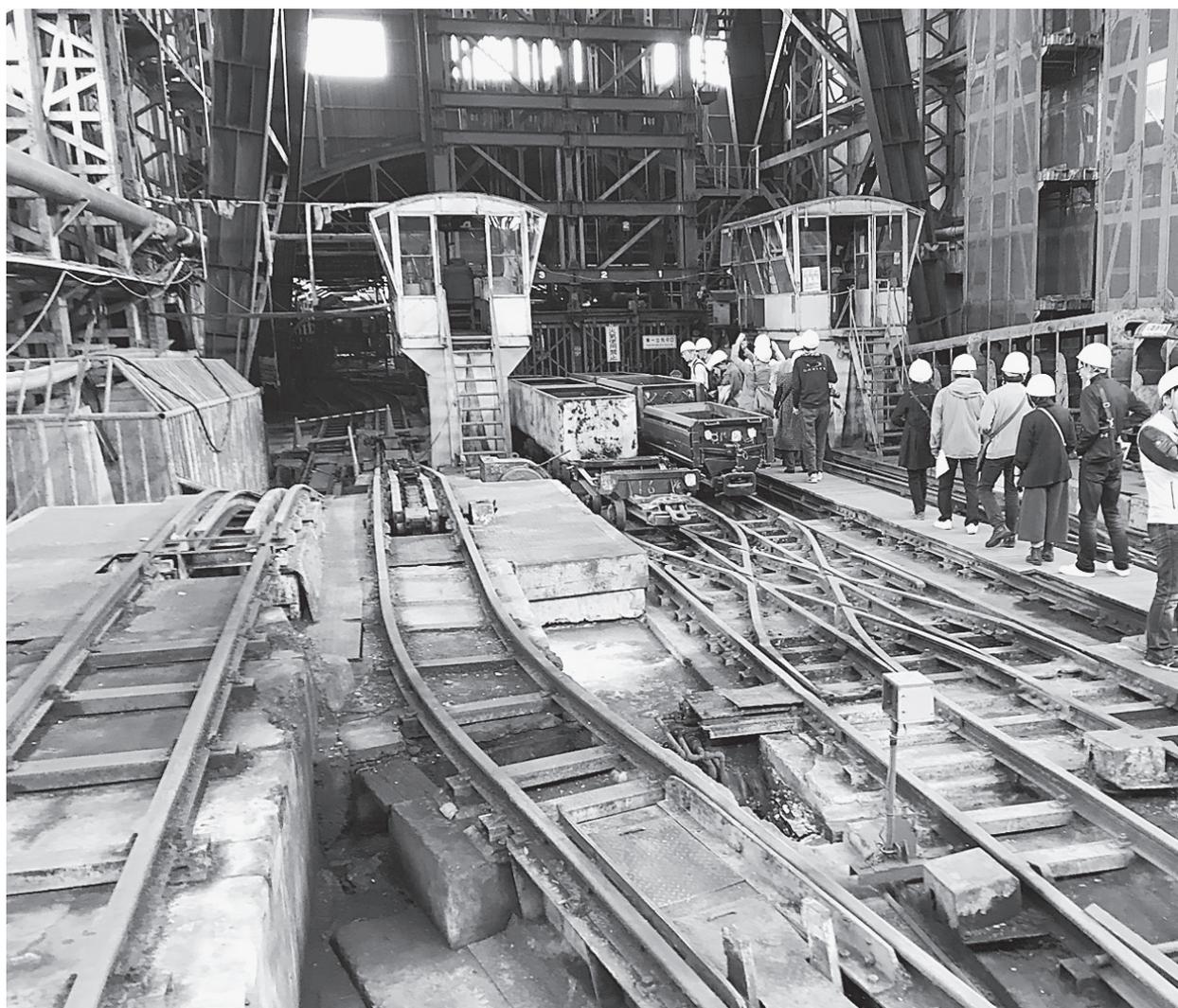
抗口浴場の前で上遠野教授から説明を受け、さまざまな作品展示のある施設の中へ

8割も減少した。この傾向は、ほかの炭砒マチでも同じで、同規模だった三笠市が5万6千人から9千人、芦別市が6万7千人から1万4千人である。

立抗周辺以外にも炭砒遺跡が保存されている。旧自走枰工場には、機械採掘の大型機械などが100点ほど展示されている。ただ、立抗や自走枰工場は、普段、公開していないので見学は、同市への問い合わせが必要になる。また、赤平駅の裏手にある旧赤間炭砒のズリ山は標高197メートル。直線で日本一の777段の階段が設置され、市のシンボルになっている。

旧住友赤平の立抗は、高さが43・8メートル、深さ600メートルで、閉山まで31年間使われた。当時最新式の設備で、もっと深く採掘が進んでも使えるように設計されていた。立抗は水没して坑





赤平アートプロジェクトで行われた住友石炭赤平炭硯立抗やぐらのガイドツアー



上遠野教授の作品の一つ「友子同盟」。坑内員の更衣室のつりロッカーの滑車一つ一つに、のし袋と白い羽根が取り付けられている。親方と坑内員は互助組織である「友子」の契りを結んで助け合い、人生の門出も祝った

内に入ることはできないが、立抗やぐらの建屋や機械、電気系統などが閉山時のまま残されている。石炭を積んだ貨車を地下550メートルから1時間に120両のペースで引き上げることができ、坑内員が入坑する際に使われた4段エレベーターは1段18人で合計72人を高速で輸送できた。その技術は「東洋一」とうたわれたという。この線路に石炭を満載した貨車が引き上げられ、大きな音を響かせて石炭を降ろし、また坑内に戻っていくのだ。

この立抗の完成で、同硯の生産量は以前の年間100万トンから200万トンに倍増したという。立抗やぐらには夜間「住友赤平炭鉱」のネオンが誇らしげに輝き、マチのシンボルとして長く市民に親しまれていた。